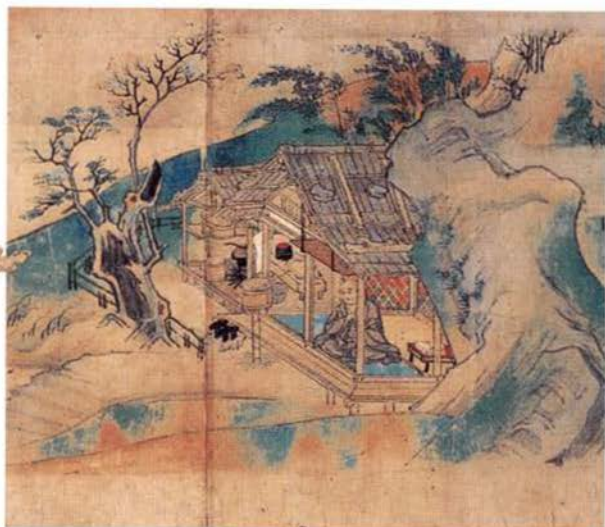


浄土

monthly
JŌDO

November 2001

11



ブロードバンドは、サービス品質で選ぶ。

世界をつなぐ未来にひらく
日本テレコム

ODNのADSLは最大1.5Mbpsの 超高速インターネット

*回線速度は、あくまでも理想値で保証されるものではありません。
また、提供局からの距離などの要因により変化することもあります。

コンテンツも充実

ODNの「ブロードバンドチャンネル」は、音楽やスポーツ、エンターテインメントに力を入れ、料理など楽しい内容が盛り沢山。

さらに大幅値下げ!

2,880円/月
24時間
常時接続

○初期費用6,600円～
○モデムレンタルの優待 500円/月
*NTT東日本・西日本の回線使用料として167円/月(タイプ1)が別途必要です。
*記載の価格は消費税別
(平成13年10月現在)

サービス 提供エリア 拡大中

札幌・仙台・東京・立川・
国分寺・武蔵野三鷹・千葉
市川・川崎・横浜・浦和・
川口・名古屋・京都・大阪
茨木・堺・八尾・岸和田
田原・和歌山・神戸
北九州(平成13年10月現在)

*上記のエリアであっても、ご提供できない場合があります。詳しくはホームページまたはテレホンサービスにてご確認ください。

【提供エリア案内テレホンサービス】

☎0088-222-3575

提供エリア検索ホームページ
<http://www.odn.ne.jp> (小・中)

ODNフレッツADSLプランもあります。



初心者でも安心の サポートサービス

お問い合わせ
お申し込み
(ODNサポートセンター J-DSL担当デスク)
[受付時間] 9:00～18:00 (年中無休)

☎0088-222-375

日本テレコム
ならではの
保守管理体制

インターネットは日本テレコム
ODN
Open Data Network

ODNのADSL
J-DSL
パーソナル

浄土

2001/11月号 目次

人生に絶望はない（前編）	平沢保治	2
表紙の言葉	宇高良哲	13
浄土名作劇場	佐藤春夫・佐藤賢順	14
連載 民話をたずねて	石崎敬子	23
響流十方	小村正孝	30
くすり箱	市川真人	34
読書紹介		36
シリーズ詠唱	吉水調	38
シリーズ・詠唱 寺院便り	松江信楽寺	40
Jフォーラム		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	47
編集後記		48

表紙題字＝浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎



「同和問題」にとりくむ東京地区宗教教団連帯会議主催第十五回研修会より

人生に 絶望は ない

ハンセン病と
六十年の闘い

(前編)



多磨全生園入所者自治会長
高松宮記念ハンセン病資料館運営委員

平沢保治

私はハンセン病であつたけれども、人間らしく生き、子供たちや多くの人達に励ましを受け、この世の中に生を受けてきて本当に良かった。このような思いを今抱いて毎日生かさせて頂いております。

こうした心地に至るまで、人間として何回か挫折の道も繰り返しました。あるときは自らの手で命を絶とうとしたこともありましたが、今私が一番力を入れているのは、児童人権教育、小学生、中学生を中心に、命というものがどんなに大切か、人間だけにある人と思う心がどれだけ大切か、生きるということは、おいしいものを食べたり、いろんなところを見に行ったり、欲しいものを買ってもらったりする喜びだけではないのだ。こういう問いかけを子供たちに行っています。

子供達は私のこういう思いにこたえ、私が学校に行くと、「平沢さんだー」と言つて大勢の子供たちが握手を求め、多くの子供たちが依りそおうと近づいてきます。こうした光景に接するとき、私は最高に充実した幸せを感じます。なぜ私が児童人権教育に力を入れたかと言うと、私は五十一年前に動物と同じような状態で、結婚と同時に断種させられました。この断種によって私には子供も孫も持つことができません。でも社会には血がつながっていないくても、私の思いを生かして生きてくれる人達がいます。この子供たちにハンセン病の歴史のような苦しみを二度と味合わせたくないと思うからです。

残念ながら差別を受けている人、そして大半を差別の中で生きている私自身のなかに、差別、という人を見下す考えがないかあるかと問いかけられたとき、残念ながらあると言わざるを得ません。人間すべてが誰よりも自分が優れていて、誰よりも自分はまともなのだと思う、それが当然の姿であります。こうした誰の中にもある差別意識を、少しでも自

ら人間として除去し、思い思われ、そして苦しみを喜びとして行く、このことこそがハンセン病の歴史から、学び取ることではないかと思つています。

私たちが資料館を作り、そこを運営し、またこうしてハンセン病の歴史をお話することも、その中心は人間の中にある一人一人のおかれてゐる状態の苦しみや、人を差別する心をハンセン病の歴史と重ねて考えてほしいということを、資料館の仕事もまた私の語り部としての仕事も問いかけてゐるわけでございます。

かつてはハンセン病は業病、天刑病（宗教的に前世で悪事をはたらいた人がなる病氣）、遺伝病といわれ、明治六年一八七三年に菌が発見された以後も、菌が発見されることによつて、法定伝染病以上の恐怖感を社会は生み出しました。菌が発見されて、医学的科学的には細菌性の伝染病でありますから、かつての業病、天刑病、遺伝病という因習は払拭され、除去されなければならなかつたわけですけれど、しかしそうした考え方は、菌の発見によつてますます恐怖感を与える結果になりました。残念ながら人の心の豊かさや生きる力を与えてくれる宗教界の中においても、布教の中やいろいろな説教のなかでハンセン病は怖い病気であるということが、七世紀からあるいはその後の状態の中でも言われております。仏教だけではなく、キリスト教の中にもそういう事例が残されております。なぜなのか、この病氣は結核やその他の病氣と違って、外部面に醜さを露呈します。あるものは目を奪われ、あるいは鼻ももげてしまします。末梢神経が知覚を失うために、そこに細菌が入つて苦痛があつてもそれを感じることができない、感じたときはもう手遅れで、指を切断したり足を切断したり目が見えなくなつたり、のどを侵されて切開をしなければならぬ、このような病氣だからであります。

だから厳しい因習の中で家族にハンセン病が、らい患者がおるということになれば、家族を守るために浮浪の旅に出、かつては乞食、今のホームレス的な生活を余儀なくされた。神社仏閣に物乞いをする患者たち、この姿はある面では壮絶な内容であつたわけだ。こういう状態を救おうとした宗教界の努力も一方にあるわけだけれども、しかし残念ながら今でいうところの人権という考え方にたつて、これを処置しようとする社会的、科学的、医学的状况は生まれ得なかつたのです。

そういう状態の中で、菌が発見され、明治に入つて日本のハンセン病問題は外国のキリスト教の人達によって、明治二十二年に現在の静岡県御殿場の神山病院が作られ、東京にも熊本にも施設が作られました。仏教では日蓮宗身延山の門前に私立の療養所が明治三十九年に作られています。

日清、日露の戦争に勝利した我が国は、先進国に追いつけ追い越せという方針の中で、ハンセン病問題、精神障害者の問題、その他ハンディキャップを持っている人達の問題は富国強兵という制度の中で、日の丸を汚すものとしか受け取られない時代でありました。そういう中で外国の宣教師や渋沢栄一氏、大隈重信氏、その他明治帝国議会の議員等が中心になつて作られたのが、明治四十年に制定された法律であります。

当初はちまたに浮浪する患者たちを收容するということで、療養所はそれをどう取り締まり、管理していくか。そういうことが中心にあつたことはいなめない事実であります。そのために所長に懲戒検束規定を設けて所内に監房を作るわけです。女性の発病率が少ないということを理由に所内結婚させ、法律もないのに断種をさせ、通い婚制度という制度でこれを認める。また逃亡を防ぐということで園内だけで使えるお金を発行する。これは

すべて隔離政策をどう行っていくか、これが主体におかれていました。園の運営は患者の労力によって全て行われ、所内には火葬場を作り、お墓を作り、そして集団で信仰を求めた礼拝堂等も作り上げました。

こういう経過を踏まえて昭和六年、国立療養所を制定するための法律「癩（らい）予防法」という法律が成立いたしました。この法律によって国立療養所が作られ、在宅の患者も療養所に収容する制度が始まりました。全国に次から次に療養所を作っていく、このベッド数を増やす口実として定員をいっぱいにしなければならなかったために、各都道府県に競って「無癩県運動」が起こります。この町を、この県を、この国を浄化するという名目で患者の強制的狩り込みが行われました。おまわりさんがつき添って白衣を着た人達、田舎のあぜ道をぞろぞろ歩き、家から家へと巡回する。当時田舎では、死ぬとき以外はお医者さんにかからないという時代、昼間どうどうと警察官付きで患者を捜し出すという、こういう行為。また、収容に協力しないものは手錠をかけてもいい、患者は近くの駅から貨物やそういうところのホームに貨車を賃しきって、患者護送中という張り紙をして、療養所の近くに護送されました。近くの駅には火葬場で使う車を配置し、療養所に送り込んだのです。今一枚の写真がそのことを物語っています。

ある者はのら着のまま、ある者は明日子供が生まれるから一日待ってほしいと言っても療養所に送り込まれました。患者が療養所に行った後は、これ見よがしにらしい病は怖いんだ、感染するんだということを社会にまき散らすような形で、消毒が行われました。また日清事変を前後にして、各園にある監房では取り締まりが緩いという形で、草津に重監房が作られたのが昭和十三年です。草津というところは北海道の旭川と同じような寒冷地です。

崖つぶちに一筋の光りも通らないようなコンクリートの牢獄が作られ、多くの人達がここに投獄され、死んでいきました。九十二件のうち書類が整っていたのはたった一件という事実は、いったい何を物語っているのでしょうか。

入所者は木一本切っても、垣根から一歩外に出ても、日本銀行券を所持していても、監督さんという職員から仕事を指示されたことができなくてもみな監房に送られたのです。また当時は食べ物を四分六といつて、麦が六、南京米四で、食事は一汁一菜ではなく、一汁と一菜なのです。朝はみそ汁とご飯。昼はたくわんとご飯。夜は菜っ葉の煮たものとご飯だけです。私たちは一年にお正月たった一日だけ一個卵を食べることができました。所内にいる豚も一年に一回豚肉として食するだけです。あるとき副食がらつきよう三つだけということに、入所者が怒って空き缶を持って本館に押しかける事件がありました。こうした一揆的不穏な行動や、園の運営に協力をしないということ園長が認めた場合にも、監房にひと月、二十九日間投獄されたわけです。

そうした投獄にあきたらず、私たちには死刑の場所を意味する「草津監房に行つて少し頭を冷やしてくるか」という言葉が、どんな苦しみにも、どんな重い作業にも、どんなまづいご飯でも、これに不服を言うことができなくなる言葉だったのです。

私はそうした状況の中で十三歳のとき一九四〇年に、ハンセン病と宣告されました。実は私の父も私が小学校三年生のときにハンセン病だということでした。私は自分がハンセン病になるまでは全然そのことを知りませんでした。ハンセン病にはL型とT型の二つの病型があり、父はT型の大変軽傷でした。なぜ三年生ということを感じているかというところ、親戚の人達が大勢集まってきて、おじさんやおばさんたちが深刻な顔をして相談をしてお

りました。そのうちに母が実家に帰っていきました。私たち三人の兄弟は何のことかわからず納屋の陰で毎日「かーちゃん、かーちゃん」と言っただけで泣いていたそうです。母はこの私たちの泣き声が届いたのか、肉親に勘当され、二度とふるさとは帰らないと言っただけのところに戻ってきてくれました。父は軽傷だったし、近所の人達が、「療養所に行く」と誰も帰ってこない。きつと何か薬を飲まされて殺されるのじゃないの、だから行かないほうがいい」と言う助言によって、父はわたしたちと一緒に生活してありました。おばさんたちから「父が病気で家にいても仕事につけないだろう、おまえが東京の学校に行つてちゃんとした一人前の人間になったとき、この家売り払ってよそに行きなさい」と言われ、私は東京の学校に行きました。

中学二年生の春休みに家に帰ったとき、目の上が蜂に刺されたように腫れ上がりました。母は直感的に父の病気がうつったんじゃないかと思い、近所の町医者に行きました。医者は全然ハンセン病のことはわからなかったのですが、母が「実を言うとこの子の父はらい病なのです」と言いました。医者はびっくりして「看護婦も、家族も外へ出ろ」と言っただけ、警察に届けました。しかし医者も警察もはつきりとはわからないので、「東京の専門的な病院に行きなさい」と言われ、東京大学の特別皮膚科教室に診察に行きました。医者は私に「坊や、君は病気だけれども軽いから、一年も治療すれば帰れる」と言いました。私はらい病という病気がどういふ病気かも知りませんでした。父がらい病だということもその時初めて知りました。友達や肉親から「お正月がすぎたら療養所に行きなさい」と言われませんでした。

しかし、昭和十六年十二月二十四日、十四歳で多磨全生園の門をくぐりました。収容病

棟入口とかかれた玄関にたつてびっくり致しました。顔をマスクで覆い白衣に身を包んだ職員と看護婦さんが私を出迎えました。すぐに裸にされて風呂に入れられ、そしてうんじまという大人の着物を着せられ、ベットに座られました。そこにはお医者さん一人、看護婦さん一人いない、そしてその職員が私に問いかけたことは、「名前をどうする」ということでした。私は「自分の名前は平沢保治、お父さんお母さんがつけてくれた名前です。なぜこれを替える必要があるんですか」と聞きましたら、「いや、替えなくては替えなくていいんだ」と言いました。その晩武蔵野を吹く木枯らしの音、また目の見えないう人を誘導する風鈴の音、患者付き添いの元気な人が奏でるマンドリンの音、この三つの調べと音は六十年過ぎた私の胸に未だに残り、特にマンドリンは私は今でも大好きです。

こうして一夜が泣きながら過ぎました。次の日ちよつと意地の悪そうなおじさんが来て「坊や、あんたの家の宗教は何だ」と訊かれました。私は子供ですから宗教というものがないんだかわからなかったので、「おばあちゃんが死んだときはお経をあげてもらった」と答えました。「それなら仏教だね、仏教に入りなさい」と言われました。「なぜ病院に来て仏教に入るんですか」と聞きますと、その人は二つ言いました。「入ればお菓子をたくさんあげる。もうひとつは死んだときにお葬式をするのに困るからだ」。子供心に思いました。「病気を治しに来たのに、なぜ死んだときのために仏教に入らなければならないんだ。これはとんでもないところに来てしまった」。こう思ったのが六十年前でした。

正月が過ぎ、少年棟に移されました。一部屋十五畳から十八畳、十人以上の子供たちが一棟に一人いる患者さんの寮父というお父さんに見張られて、ときどきあなたがたは園長から預かっている患者だ、園長は、お前たちは、天皇陛下から預かっている患者だ、だか

らどんなに苦しくても、どんなに外が恋しくても、外に出ることはまかりならんと言われ、当番で暗いうちに起きて、お勝手掃除、便所掃除、廊下掃除すべての生活は、子供であっても自分で行わなければならなかったのです。

当時ハンセン病は、幼児期に菌が入って思春期に発病されると言われておりました。千人近い入所者のうちの八十人くらいは子供でした。女の子は二十人くらい。就学児童がその三分の一くらいでした。小学校の子供たちも午前中は園の仕事をし、患者が寺子屋式に教える所内の学校に行かされました。私は小学校を終わっていましたから、竹を使って籠作りの勉強をしるという命令によって、籠作りの職人を目指して頑張りました。軍国少年として軍事教練も受けました。今でもその跡が残っておりませんが、望郷台の近くに国旗掲揚塔があり、そこに国旗を掲揚し、神社、皇居を拝拝し、本土決戦に備えて、らい患者であつても鬼畜米英と差し違えて死ぬ人間であれという教育をされ、自分自身もそう思つて毎日励みました。私たちが外に出られるときは、近くにB29が落とした爆弾の穴埋めや、爆撃で多くの人が死んだ後かたづけにかりだされるときです。おにぎり二個でおなかはずき、へとへとになるけれども、外にでられるということ、自由というものがどんなにすばらしいものであるかということ、を味合せてもらいました。このような状態の中で食料もない。夜中に垣根を抜け出して買い出しにいくにも、使える貨幣はなく、万が一手に入つても、終垣のところで監督に見つかり没収される。こういう二重三重の囲いの中で生きるために、私自身人の肉以外食べられるというものは、草であろうと獣であろうと食べて戦争に勝つという意識の中でその時代を生き抜きました。

昭和二〇年八月十五日、天皇の玉音という終戦の言葉も信じない精神の人間でした。そ

のことがわかったときやけになって、池袋や上野の闇市に行ってチンピラとけんかになって、飲めない酒を飲んで暴れ回りました。ハンセン病はかつては大風子油の筋肉注射で症状が安定します。しかしこの薬は再発したときに効きめがないという弱点があります。私はそういう状態の中で病気が再発してしまいました。そのときアメリカで結核のために作られたプロミンという薬が日本にも入ってきます。昭和二十二年に試薬試験が始まりました。みるみる再発した病気がよくなることが確認でき、国に対してプロミンの予算六千万円を要求致しましたけれど、残念ながら、国はハンセン病療養所は病気を治すところではなく、そこで死んでもらうところという考え方が強かったでしょう。薬の予算をなかなかつけてくれませんでした。私の母は土地を売って金を送ってくれました。早く良くなって私が帰るために、屋敷に竹を植えて待ってくれていました。今でも私の家には竹林が残っています。母の形見です。しかし残念ながららい菌は、試験管の中で培養することができないので、薬の調合が当時は完全でなかったのです。私は薬の分量を間違えて手足にしがれが来て、籠作りができなくなっていました。

(つづく)



「ふるさとにかえりたい」

もういいかい　まあだだよ

うつらないから　もういいかい

まあだだよ

なおったから　もういいかい

まあだだよ

もうじき死ぬから　もういいかい

もういいかい

もういいかい

骨になっても　まあだだよ

中山秋夫

ハンセン病療養所には、「もういいよ」の応えを待つ

戸籍のない二三七〇〇の遺骨がある。秘かに名前の書かれたたくさん骨壺がある。

平均年齢七四歳、療養所で暮らす四四〇〇人の回復者がいる。

一九〇七年の強制隔離から九十余年のながいながい時を経て、

「ごめんなさい」とあやまった。二〇〇一年五月、総理の「控訴断念」

ハンセン病違憲国家賠償訴訟の勝利。

だが、まだ、ふるさとか「もういいよ」の応えはない。

「おかえりなさい」は届かない。

ふるさとは　まだとおい。

「茨城新聞」より

平沢保治（ひらさわ・やすじ）

一九二七年生まれ。十三歳のときにハンセン病と診断され、多磨全生園に入園。戦後ハンセン病患者・回復者の運動、地域の障害者運動に関わる。らい予防法下を生き抜いた一人として、さまざまな分野での対話活動を本名を公表して行っている。著書に「人生に絶望はない—ハンセン病—一〇〇年の戦い」（かもがも出版）創作童話「僕のおじさんはハンセン病・平沢保治物語」（全障研茨城支部）がある。

法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

阿弥陀三尊影現の図

法然上人が阿弥陀三尊像を拝見された故事は各種法然上人伝に記されている。『四十八卷伝』第八の三尊影現の図には、「草庵をたちいでて、帰り給へけるに、弥陀の三尊、絵像にあらず、木像にあらず、垣を離れ、板敷にも天井にもつかずして、おはしましけり、」とあり、法然上人が室内の空中に浮んでいる三尊像を拝見されている。増上寺蔵の『残欠二卷本』には、「上人ある夕暮の事なるに、広縁に向ひて念仏して有けるに、弥陀の三尊、絵像にもあらず、木像にもあらず、垣を離れて、天にもつかず、地にもつかずしておはしましける、其後拝見し給ひ御言葉をかはしたまふ事、度々なりけり、」とあり、法然上人が室内から空中の雲に乗った弥陀三尊像を拝見されている。しかも三尊像は自然の中で、動物に描写されている。

法然上人の諸伝記中、分量の少ない『残欠二卷本』であるが、この場面の描写はもっとも具体的である。前号の善導和尚来現図の直後にこの三尊影現図が所収されている。

(宇高良哲・大正大学教授)

特別企画

浄土名作劇場

昭和三十年一月号

家庭生活

佐藤春夫

作家

死

佐藤賢順

大正大学教授
浄土宗願行寺前住職

家庭生 活

佐 藤 春 夫

念佛ねんぶつの教をへはもとと在家ざいけの衆しゆを主にしたものであるから家庭生活かていせいんつのどの部分ぶぶんともすこしも牴觸ていふくしない重寶ちやうほうなものです。宗祖しゆしゆの上人じやうじんは

たとひ餘事よじをいとなむとも、念佛ねんぶつを申し申しこれをするとおもひをなせ。餘事よじをしし念佛ねんぶつすとはおもふべからず。

と仰あふせられてゐるから、家庭生活かていせいんつをしながら念佛ねんぶつの行ぎやうをしてゐると思おもはずに、念佛ねんぶつの行者ぎやうじやが生活せいふつの便宜べんぎ上じやう家庭生活かていせいんつを営いんでゐるといふ心がけでゐればいいものと思おもはれます。一たい念佛ねんぶつはどういふ時にどういふ風ふうに申まをさねばならないといふものではなく、いづどこでも、申まをせるやうな状態じやうたいで、申まをしたいと思おもつて申しさへすればいいといふ事ことであるから念佛行者ねんぶつぎやうじやの家庭生活かていせいんつは申まをすまでもなく家庭生活かていせいんつの折をりふしに念佛ねんぶつを申まをすだけのひまひま（せいぜい一分とはかからない）と、念佛ねんぶつを申まをして見みたいといふ心こころを持もつてさへるれば啞おしでない限りは出來る行ぎやう（わざ）なのである。さうして疑うたがひながらも申まを

しさへすれば往生わうじやうが出来できるとも聞きいてゐる。

往生とは何か將來何不足のない生活を得られるといふ希望とを認めて、その希望によつて現在の心持が輕快になるありがたい境地を指すのである。こんな心持や、絶對の歸衣服従といふやうないぢらしい他力精神、しばらくはお人好しの馬鹿になつて樂しむといふ程の氣分が、家庭生活のどの一員にとつても邪魔な氣分不都合な道理も別にありますまいと思つてゐますがどんなものでせうか。

家庭生活を不愉快にし一切の社會生活を不安にしてゐるものは、およそ念佛の氣持とはうらはらの「おのれが」「わたしが」と頑張り合つてゐる心ではありますまいか。さうだと御同感になつたら、今これを讀む序にすぐ、そのまま――

なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、
なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあ
みだぶつ。

いまめ　み　ふつう　こゑ　おんどく
と今日に見たままを普通の聲で音讀してください。

念佛ねんぶつの行ぎやうといふのは、
ついそれだけの事ことなのです。

そんな事がどういふ理屈りくつで有難ありがたいのか。それは僕の知つた事ではないし、誰も別に知らなくてもいいはなしださうですよ。何もかもついそれだけのあつけないほどのものです。

死の恐怖

死

佐藤賢順

宗教は死の恐怖に始まると言つた。恐怖とは未来についての心構へから起きる。フ
オイエルバッハが「死がなければ宗教はないであらう」と彼一流の曝露的な宗教批
判から言つてゐるが、警戒して受取るべき多くの點があるにしても、この言葉は一面
に於いて正しい眞理である。

私達の先達は誰れも皆、死の克服から出發した。日本佛教の、特に平安・鎌倉の時
代の先覺達の第一の問題は「生死」であつた。如何にして「生死」を脱け出でるかで
あつた。「われはなにによつて生死にはとゞまれるぞと、はづべしはづべし、かなし
むべし、かなしむべし」と法然上人の御法語にも見える。「速かに出要を求めてむな
しく歸ることなかれ」と教へられた。出要は生物學的な生死を離脱する要道である。
道元禪師は教へてゐる。「無常迅速なり生死事大なり。且く存命の際だ、業を修し
學を好まば、只佛道を行じ佛法を學すべきなり。」「無常迅速なるを忘れて徒らに世事

に煩ふこと莫れ。露命の且く存せるあひだ、佛道を思ふて餘事をことゝすること莫れ」
 (正法眼藏隨聞記)。道元の態度は、一事一藝を専らにせんとするにさへ、鈍根劣器の
 者はかなふべからざるに、まして生死といふが如き一大事に處するに、四方八方に手
 を出して、文筆詩歌、顯密の聖教などあれもこれもと多般を兼學するは以ての外であ
 ると、事態の核心へ迫つてゆく。

更に私達は、親鸞聖人や一遍上人の態度が全くこれと同じ所に發足してゐることを
 見たいが、今はその餘白を持たない。

死に對する恐怖感は年齢によつて異なる濃度を持つてあらう。言ひ換へると、それは
 生命力、慾望の強さに正比例するであらう。年を老つてから後生を願ふといふのは、
 よく言はれることであるが、それは生に對する止を得ざる諦めからであつた、實際は
 生命力の旺盛な間こそ、死に對する關心も痛烈である筈である。東西の大祖師達の
 足跡を顧みるならば、その發足はいづれも二十代三十代の青壯年の時期になされてゐ
 るのを知るであらう。

茲で、幼年の死、青年の死、老年の死と色々な死が考へられる。幼年の死は無意識
 の死である。青年の死は最も意識的な、生命力と死との戦ひの間に於ける死である。
 老年の死は必然的な宿命についての諦めの死か、或は又、自然性との長き闘争の後に

掴んだ死よりの超越である。

去年の丁度今頃は、私の六つになる子供は、醫師から十のうち十まで殆んど見込みはないと宣告されて、慶應病院の一室で一日一日とその日の迫り来るのを待つてゐなければならなかつた。私には、神宮外苑の芝生が黄ばんで、繪畫館ドームが淺黄色の空に浮んでゐるのが、別の世界のやうに見えてゐた。子供は死ぬことについて何か知つてゐたであらうか。まだそんなに病氣の進んでゐなかつた夏の頃のこと、湘南の海岸へ療養にやつて置いた。私が尋ねてゆくとよく外へ遊びに出たが、抱いたり背負はせたりして、松原を通つて砂丘を超えて海岸へ連れてゆく事があつた。その松原の中に朽ち果て、はゐたが古墳らしいものがあつた。子供はそれを氣味悪がつて「幽霊が出る？」と訊いたことがあつた。何かそんな事の意識や恐怖を幾分持つてゐたのであらうか。全く無意識に死んで行つてくれたのならよかつたが、と時々考へることがある。

九年程前に私は親友の一人を亡くした。彼は三高から東大の佛法科を出た白皙瘦體の秀才型の青年で、學校を出た年に、高文の試験準備に夜に日に次いで心身を傾倒してゐる時、寢着いてしまつた。その翌年の春、或る夜重態だといふ報せを受けて、そんな病勢だとは少しも知らなかつた私は事の意外に慌て、馳せつけて、彼の枕頭へ滑りよつた。もう呼吸の數が非常に多くなつてゐた。その苦しい喘ぎの間から、「お

い！俺はもう一度立上るよ。今死んだつて死に切れるかい。」さう決然と言ひ離つた。然しまたふつと突然に、胸に迫る不安を吐き出すやうに、「おい！死んだらどうなるんだい、一體？」と私の眼を見上げた。その眼は好い加減な事を言つたつて駄目だぞ、と私を責めるやうであつた。どんな私達の言葉も彼は受けつけなかつた。別室で家の人に訊いてみれば、もう一度立上れる容態では決してなかつた。その時に、何一言彼をほんとうに安らかにさせてやる事の言へなかつた私は、何時かは彼の靈に詫びたいと思つてゐた。

尾上蟹十郎丈は菊五郎門下の中では名代役者で、その一種性格的な藝風が人氣を呼んで、一座には無くてはならぬ人であつた。最後の當り役は長谷川伸氏の「暗闇の丑松」の中の一役であつた。この人の曾祖父の兄になる人が、私の寺の住職であつたから（勿論私など未だ生れない頃の話である）、今でも蟹十郎丈の一家とは特別親しくしてゐて、村田嘉久子さんなど三人の妹さんとも親類以上の交際になつてゐる。

蟹さんのお父さんは篤信の念佛信者であつた。自分の家にお寺のやうな佛間を作つて、そこで法話を聴きお経を習つた。三部經などよく讀んださうである。

蟹さんは梨園の人に有り勝ちな無理と不養生が祟つて、今年になつてから床に着いて七月頃にはもう醫師に見離された。死をはつきりと自覺してゐた。死に直面したとはよく聞く言葉であるが、この人程にはつきりとそれを意識して、ズリ／＼やつてく

るその日を待つてゐる人も少なかつたであらう。

八月の或る日、彼の病床を見舞ふと、顔は白蠟のやうに血の氣を失つて、身體も全く動かせなかつたが、病人とは思へぬ元氣で、捲し立て、悪態をついてゐた。「この通りですよ」と言つて、枕頭にある珠數を取り上げて、「暇さへあればこれですよ」と言つた。

——うちの親爺はね、あつし達の小さい時から「人間は安心立命といふ事が一番大事だ」と年中言つてゐた。あつしはそれを忘れない。死ぬ時に慌てるのは見つともないやね。何時死んだつて思ひ残すことは何もありませんよ。子供があるぢやなし、財産があるわけぢやなし。今までにやりたい放題の事は大ていもうやつてきたからね。死んだつて一寸も淋しくない。墓の中には親爺も妹も皆んな待つてゐるからね。あれはうちぢや誰の臨終の時でも床の間に懸けることに定めてある——
と言つて顎を動かして床の間を示した。床には私の寺の何代前かの和尚が贈つた「南無阿彌陀佛」が懸けられてゐた。

もういけないから辭世を作つちやつた——
懸軸の傍に短冊が立てかけてある。

蟹一つ蓮の葉に乗る夏の池
戒名も自分で作つた。これでいゝですか。あつしの名も親爺の名も母の名も

妻の名も皆一字づゝ入れてある――

成る程、皆の名が一字づゝ、案配されて、短冊に書かれて辭世の隣りに立てかけてある。

この人は死に對して、洒々落々、まるで死を弄ぶやうである。

死んだらお通夜だの葬式だの止めてくれ。極楽へ行つて芝居をするんだから、送別會にしてくれ――

そんな事も言つたそうである。もう愈々駄目だと聞いて菊五郎が見舞つたとき、珍問題が取り交はされた。

「蟹さん、お前さん死んでも俺の所へ化けて出てきちや厭やだぜ」

――どう致しまして。こつちが怖くつてとても行かれない。夜なんかとても出られない。出れば晝間ですな――

死にはいり込んでゐるのでなくて、死を眺めてゐる。餘裕綽々として自らの死に對してゐる。それは蟹さんの性格にもよらう、現在の環境にもよらう、然しその後、さうさせる力がなければならぬ。幼少の頃から教へ込まれてゐた力のお蔭でなければならぬ。

幼年の死、青年の死、老年の死、死の性格はそれぞれに違ふ。私達は澤山の死を見た。然し蟹さんの死の如きは、最も朗らかな死であらう。

民話
をたずねて

連載

石崎敬子

菊の嫁さん

SHIKAWA



むかしあるところに、あんにやが住んでおったそうなの。あんにやは、来る日も来る日もせっせと働いておったけど、それはひどい貧乏で、嫁に来てくれる娘もおらん。あんにや一人暮らすのがやつとことだったそうなの。

こんなあんにやだったけど、菊の花が何より好きで、毎年、庭に菊の種を蒔き、大事に育てておったそうなの。菊に虫がつけば、可哀想にと虫を取り、風が吹けば、大丈夫かと倒れぬように棒を立て、仕事の合間をみては、なにかと面倒をみておったそうなの。

あんにやがたいそう可愛がるもんでな、毎年秋になると、あんにやの家の庭は、白や黄色、桃色などの菊の花でいっぱいになったそうなの。

ある秋のこと、菊の花がいつもの年より一段ときれいに咲きそろったそうなの。その中に、真っ白な、ひとときわ大きく見事な花があったそうなの。

「おら、こんなきれいな菊を見るのは初めてや」

毎晩毎晩、あんにやは白い菊の花の前に立っては、見惚れておっ

たそうな。

ある晩、とんとんと小さく戸を叩く音がする。

「さて、誰やろ」

あんにやが戸を開けてみると、透き通るように色の白い、愛しげな娘が立っておった。

「すみません、今夜一晚、泊めてくだされ」

鈴を鳴らすような声でそう言う、娘は頬をぼっと染めた。

「ああ、こんなあばら屋じゃが、泊まればええ」

さあさあと、娘を招き入れると、不思議なことに、家の中がぱあっと明るくなったそう。

「さて、夕飯じゃが、おらのうちにははろくなもんしかない」

どうしたもんかと、あんにやが思案しておると、

「夕飯ならおらがこしらえる。その代わりちいっとの間、目をつぶってくだされ」

と、娘はいそいそとかまどの前に立ったそう。

言われるままにあんにやが目をつぶっておると、しやしきしやきと

民話

をたずねて



SHIKAWA

米を研ぐ音がする。ばちばちと薪のはぜる音がする。そのうち、ぐつぐつとまんまの炊ける音が聞こえてきたそうなの。

「さあ、できました」

あんにやがそつと目を開けると、ほわほわと湯気の立った真っ白いまんまがあつたそうなの。

次の朝も、その次の朝もあんにやが起きると、もう朝飯の支度ができておる。

「このまま、おつてくれたらなあ」

ほかほかのまんまを前にして、あんにやは小さくつぶやいた。

「おまえさま、おらをこのまま置いて下され」

あんにやの声が聞こえてか、娘は恥ずかしそうにうつむいたまま言つたそうなの。

その日から娘はあんにやの嫁になり、まめまめしく働いたそうなの。いつしか暮らし向きも楽になり、あんにやは、何の不足もなく暮らしておつたそうなの。

ところが、一つだけ気になることがあつたそうなの。近所でも評判

の美しい嫁さんであったが、どうしたわけか足にいつも泥がついておる。いつこうに洗おうとせん。風呂にも入ろうとせん。

とうとうたまりかねたあんにやは、嫁さんに言うてみた。

「たまには風呂にでも入ったらどうや」

「おら、風呂は大嫌いだっ」

いつもは優しい嫁さんやったが、この時ばかりはきりつとした目で、きつぱりと言ったそうな。

「足だけでもきれいにしたらどうや」

「いやだっ」

あんにやがどんなに言うても、嫁さんはただただ首を横に振るばかり。

「ならおらが洗ってやる」

あんにやは、嫌がる嫁さんの手を引つ張り、風呂場へ連れて行き、構わず嫁さんの足に湯をかけたそうな。

途端、嫁さんは力が抜けたようになり、急に元気がなくなつたそうな。

「あれ、どうした、大丈夫か」

驚いたあんにやは、ぐったりした嫁さんを寝かせたそうなの。

次の朝、嫁さんの様子を見ると、布団の中に姿がない。かまどの前にもおらん。慌てて家の中、家の周りと走り回って探したが、嫁さんはどこにもおらん。声をからして呼んでみても返事もない。

あんにやは探し疲れて、庭先にへなへなど座り込んだ。ふと膝元に目をやると、どうしたことか、昨日まであれほどきれいに咲いておった白い菊の花が、倒れておる。よく見ると、なんと根っこがきれいに洗われており、だらんとしおれておったそうなの。

それだけの話。

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

服社
有会

古島法衣店

〒111-0044

東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-11289

振替0018012145231

怒った人に対して怒り返す人は、

それによっていつそう悪を為すことになる。

怒った人に対して怒りを返さないならば、

勝ちがたき戦いにも勝つことになる。〔相応部經典〕七―一―三

祈りを

何よりもまず、掌を合わせ、心から祈りたい。稀に見る惨劇に殉じた大勢の人々に、そして、あらたに生じつつある犠牲者に――

あの日、世界の経済中枢都市では、いつもどおり活潑活潑地な一日が始まろうとしていた。青天の霹靂とはこうしたことを言うのであろう。狐につままれたような、と表してもよい。あまりにも突然で、無謀かつ粗暴と言わざるを得ないこの出来事により、数千人が命を落とし、その何十倍、何千倍もの人々が言葉を失い、力を失くした。

幾許かの時間が流れ、失われていた冷静さが徐々に人々の心に戻り始めると、今度は爆発的な怒りが生じてきた。失したものの大きさ、多さに比例するかのようにならぬ一氣に上り詰めようとした。

致し方ない。

これに怒らずして、何に怒れというのか。

ここで怒らずして、いったいいつ怒れというのか。

世論は一つの同じ目的に向けて胎動し始めた。しかし、世界の人々に決起を促した原動力――その怒り――が、実はあらたなる悲劇と、甚大なる喪失

と、さらなる怒りを繰り返す輪廻の始点となることはほぼ間違いない。そして、その一歩が踏み出された。

国家間の「同盟」「連盟」といった契約は、こうした事態のために交わされているものであろう。「人類」という共同体の枠組みにおいて、「自由」と「平和」を守るためには、きわめて重要な仕組みである。しかし、やはり闘争は闘争を呼ぶ。これにも間違いはない。その闘争を「決して報復ではない」といかに正当化したとしても。

「自由と平和を守る」という、人類永遠のテーマ（しかしその「自由」と「平和」の持つ意味が、民族や宗教観によつて大きく異なることにはここでは触れない）を完遂するためとはいえ、武力の行使という手段のみでしかそれを具現することはできないのだろうか。ほかに道は残されてはいなかったのだろうか。

このわずかひと月間の出来事に、人類の歴史と人間の性、真の相が余すことなく凝縮され、またそこからそのすべてが露呈された。そして今後の動向にも、やはりそれが凝縮され、そこからすべてが露呈されていく――

二千五百年前に釈尊が提示した法（のり）には、人類が、世界が歩もうとしている道筋を変える力はないというのか。宗教的土壌の違う当事国民の間から聞かれる闘争反対の声（たとえ少数ではあっても）が、その疑念を払拭しようとしてくれる。

かつて知己から問われたことがある。

「おまえの目の前で、自分の子どもが理由もなく誰かに殺されたらどうするか」

返答することのできなかったもう一人の自分がいる、確かに。それが凡夫なのか。これが人の世なのか。

真の「自由」「平和」とは何なのだろう。
祈るのみである、ふたたび。

（小村 正孝）

連載

『くすり箱』

8

ききよう

私たちが日常目にする植物は数え切れないほどありますが、意外とその名前は知らないものです。邪魔な雑草と一把一絡にされて片付けられてしまうこともあるのではないかと思います。まして薬効となると、全くと言っていいほど知られていないのではないでしようか。

太陽の恵み、自然の恵みを十分に受けて育った草木には、私たちの遠い祖先より連綿として伝えられてきた尊い薬効が秘められています。また、「山川草木悉有佛性」という言葉もあるように、佛性のある草木を頂いて治

すということは本当にありがたいことだと思います。この伝統ある草木がいかに関立つものであるかは言うまでもありません。しかし最近では、化学合成医薬品の陰に隠れ、ともすれば忘れられがちになっています。

民間薬（伝承薬）として使う草木は私たちがいつも見ていたり、ちよつと手を伸ばせば、いや、伸ばさなくても採れる所にいくらでもあります。その使い方を覚えておけばとても便利ですし、美しい花を咲かせるものも数多くありますので、庭の隅、鉢植えなどにも良いと思います。ぜひ、ご自分の手で採り、刻

薬剤師

市川真人

み、干し、服用してみても下さい。

☆ききょう (ききょう科)

★漢名・桔梗 ★薬用部位・根 ★採

取時期・秋の終り頃から翌春の萌芽するまで
★採取・加工・茎を刈り根を掘り上げて土を
タワシ等でこすり落し、軽く水洗いし、刻ん
で太陽にあて、十分乾燥させる。

★成分
・桔梗サポニン、イヌリン等 ★生育地・

日本では、北海道、本州、四国、九州の山野
の草地に自生している。

秋の七草の一つとしてよく知られており、
茎や葉は傷をつけると白い乳汁を出す。青紫
色の花は楚々として日本人好みで、とても美
しい(白い花の桔梗もあります)。山野に自生
してはいますが今、その数は激減しています。
山家の庭には多数植えられています。皆様も
根が手に入ったら、観賞、薬用を兼ねて、庭
または鉢に是非植えてみて下さい。

★薬効・用い方・①痰(たん)切りⅡ根約
2グラムを煎じて服用。うがいもよい。②の

どが腫れて痛み、痰が切れないときⅡ根1・
5グラム、甘草3グラムに水約200mlを入
れ、半分に煎じ、一日二回に分けて、うがい
をしながら服用(甘草は薬局でお求め下さい)。
③全身症状のない化膿性の腫れ物(おでき、
菌槽膿漏など)Ⅱ根1グラム、芍薬の根3グ
ラム、枳実5グラムの粉末を混ぜ、一日量3
グラムに鶏卵の黄身だけ一個分を入れてかき
混ぜ、二回に分けて空腹時に服用。(枳実はミ
カン、ダイダイ等の未熟果で、半分に切って
乾燥させたものです)
尚、ここに書いているグラム表記は、乾燥
させた生薬の大人の一日の量です。



読書紹介

一枚起請文あらかると

野田秀雄著

平成十二年十月十五日 四恩社刊

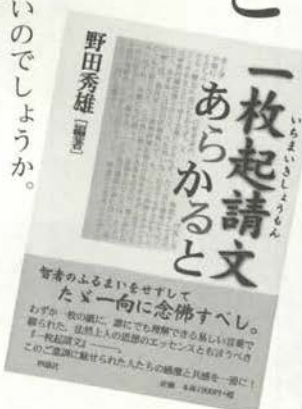
「一枚起請文」は浄土宗の教えの要であると言われてきました。南無阿弥陀仏の浄土宗のお念仏を、ただ一枚の紙にまとめられたものということであります。とくに法然上人がお亡くなりになる二日前に、いふなれば、法然上人生涯の結論を、後々永久に守り伝えようと一枚の紙にお書き示しになったものであります。まことに尊いみ教えのエッセンスともいふべきものであります。

もちろん浄土宗の人はそらんじるほどよくお唱えしています。ところが、浄土宗では、ただ一向に念仏すべし、ということが先行して、この文の意味をあまり考えずに、それこそ棒読みでお唱えするだけの人もかなりある

のではないのでしょうか。

ある講習の席で、そのようなことをもうしましたら、早速手が上がって「二尊」というのはなんですかと質問がありました。「浄土」の読者の方はご存じかと思いますが、それほど理屈というか、解釈に気を取られていないとか、ただ念仏のみでよいという気構えが先行して、個々の文字のことは詮索しないのだ、という雰囲気があります。

しかし、この「一枚起請文」には不思議と、数字を頭にした名詞が多いようです。題名からして一枚、一向、一代、二尊、三心、四修等々ありますが、分らないまま、ただ読むだけの方が多いと思われまふ。この書で改め



て「一枚起請文」を味読して欲しいと思います。

また、この書の特徴は、各方面の、いわゆる浄土プロパーでない方々も含む各方面での一流の方々（姉崎正治、石塚龍学、一休宗純、井上圓了、梅原猛、小川隆宏、小沢芦庵、川口松太郎、亀水了詳、倉田百三、桂洲、幸田露伴、孤立大我、佐藤春夫、千利休、尊朝法親王、高村光太郎、土屋光道、筒井絃一、手島堵庵、藤堂恭俊、西田天香、平沢興、藤吉慈海、藤本淨彦、ベアトリス・E・L・鈴木、町田宗鳳、松濤弘道、柳宗悦、鷺洲）によって読まれ解釈されていることであります。

そもそも、この『浄土』誌は法然上人鑽仰会といいますが、鑽仰というのは『論語』の中の「仰之彌高、鑽之彌堅」というのが出典であります。仰げば仰ぐほどますますその徳は高まり、しかも、研鑽し、追求するほどその徳は堅固なものとなる、という事で、普通、言偏の鑽仰と書いてしまいましたが、法然上人鑽仰会の鑽は鑽え仰ぐのではなく、金偏で鑽（切る）、穴を開けるの鑽孔の鑽の鑽仰です。色々の角度から追求すれば追求するほど確固

とした強さが分かる、法然上人はそういう方である。という意味で会名がついています。その意味で、本書は、各方面の方々により異なった角度で追求し、掘り下げられており、法然上人の真価が益々分かるというものであります。

さて、「一枚起請文」の中で、デッドロックともいふべき箇所があります。それは、「二文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じうして」という所であります。私はこれは先年亡くなられた藤堂恭俊増上寺台下の御解釈であるべしとしております。

以上、るる、述べましたが、百聞は一見にしかず、従来にならぬ編集による「一枚起請文」の手引きというかこの解説をご覧下さい。

著者 大正大学史学科卒、早稲田大学大学院（日本史学）終了、芝学園中高教諭、華頂中高教諭、同校長、知恩院史料編纂所編集員、現在小倉学園理事長、見性寺住職。
発売元 京都市下京区七条通間之町東入K Sビル5A、電話075-3444-5302
（A6版、168頁、1900円十税）

シリーズ詠唱 総本山知恩院吉水講創立五十周年 記念大奉納大会 成満

九月二十八日から十月四日までの七日間にわたり、吉水講の創立五十周年の記念大奉納大会が知恩院で開催され、ハワイをはじめ、三十七教区およそ一万五千人の講員が参集、御影堂の特設舞台で奉納された。

大会初日の二十八日には庭儀式が行われ、池上霊心理事長、松濤基道顧問の白のオープンカー、牧達雄総本部長の赤のオープンカーに続いて、ご詠歌隊が「慶祝和讃」「吉水講集い五十周年の歌」をお唱えしながら東大路通をまわる御影堂までのコースを行進した。千人にのぼる行列の中で目を引いたのは、ムーム姿のハワイ教区。米国同時テロ事件後の緊張の残る中にもかかわらず、十数人が来日され、奉納された。

続いての開白法要では中村康隆総裁が導師を務められ、御影堂いっぱい講員とともに、



庭儀式では特製のパルーンを先頭に行列が続いた。



秋晴れの中、大奉納大会が始まった。写真は御影堂。



厳肅な法要が執り行われた。法要後には新曲「佛名会和讃」と新舞「至誠心の御詠歌」も発表された。

翌日からは各教区の奉納が続ぎ、十月二日には来年創立二十周年を迎える大本山増上寺の聖歌隊を中心とする東京教区が増上寺和讃を奉納し、大きな拍手を浴びるなど、東西講員の良き交流の場ともなった。

七日間にわたる大会は、四日の閉会式で幕を閉じたが、吉水講の五十年の歴史と多くの先達に感謝をし、同時に明日からの糧となる大奉納大会となった。



和讃と詠歌を唱えながら歩く講員のみなさん。



庭儀式にあたり三門前で払子をふる牧総本部長。



御影堂を埋め尽くしての開白法要。



白のオープンカーで先頭を切った池上理事と松濤顧問。

我が寺の詠唱会

出雲教区松江組 信楽寺

当地松江地方は、人が亡くなり葬儀が終ったあと、満中陰まで、七日七日の連夜のおつとめに宅に行く。おつとめのあと私は「光明摂取和讃」を唱える。「人のこの世は永くして、変わらぬ春と思いに」自他共に認める悪声であるが、仏前であり、故人を偲ぶ気持ちの強い雰囲気の中では、声の良し悪しはさほど問題にならない。唱える私自身がしみじみとした気持ちで唱えると、お経の時には哭かなかった人が、ご詠歌を唱えるとき涙を流し、人によると「ご詠歌でうたわれている通りですわね」と共感する。そんな気分が漂ってくる、法話がしやすくなる。ご詠歌を唱えるこ



当山本堂における詠唱練習

とによって亡くなった人の気持ち、願いを偲び、残された人の悲しみを共にしていく。理屈や、仏法の説明、心得はゆっくり話せば良いことで、まず、悲しみを共にする事が必要であり、その意味でもご詠歌はたいせつだと思ふのである。

私の寺でご詠歌をはじめたのは、昭和四十九年十月、鶴田定伸上人が指導に来られたのがはじまりである。

最初は住職である私自身が、「ご詠歌」と云うと昔の老人の間に行われた、物悲しい、過去の遺物で、現代に通用するものではないと思っていた。

ところが、講習を受けた若い近代の女性が極めて積極的、意欲的に詠唱にとり組みだしたのである。いまひとつ幸運であったのは、檀家の篤信の念仏者で、音楽を専門とされる高木勇という校長先生があった。ご詠歌の指導と音楽教育を併用して、年間のカリキュラム（指導計画）をたて、伝統のご詠歌並びに作法を尊重しつつ、音譜による間口の広いご詠歌指導を協力いただいた事である。現在副



中四国詠唱発表会

住職が担当しているが、指導計画はその当時の計画書を踏襲している。

さて、私はお経もご詠歌もなるべく参詣者全員参加の読経、ご詠歌にしたいと思っている。そこで年中行事の修正会（新年会）春秋の彼岸法要、盆施餓鬼会、毎月の例会（つきかげ会）には必ず、ご詠歌奉納が行事中に組みこまれている。殊に詠唱が存分に活用されるのは十夜法要である。差定（法要次第）に従った十夜の法要のあと、各家の仏様の塔婆供養を営む。長さ四十五糎、厚さ一糎の小型塔婆に戒名を書く、二百枚でも三百枚でも七回に分けて回向するその際は、「十夜和讃」「追善供養和讃」の中から七番を抽出して、全員に印刷した歌詞を配り、四誓偈を全員で唱え、三十本か四十本の塔婆を読み上げ、「追善供養ご和讃にー」で鈴鐘を持った詠唱会員が中心となつて、参詣者全員が歌詞をみながら和讃を唱えるのである。その意味で十夜法要の半分はご詠歌、和讃によって支えられている。吉水講創立五十周年の年にあたり、詠唱の益々の発展を祈る次第である。



舞を交えた詠唱発表



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●顔

〈特選〉

行く秋や顔重なりし。ピカソの絵

嶋田喜代子

重なっているといつても、二人の顔ではない。立体派では多方向から見たものを一画面にまとめるから、このように見える。しかしこういう理屈でなく、秋が行くという思いを、素直にこの顔に重ねればよいだろう。

〈佳作〉

青空や羅漢の顔に乱れ菽

鈴木 順子

スナツプの笑顔に若き夏帽子

宮沢 文子

手鏡の顔のくすみや今朝の秋

井村 善也

●手紙

〈特選〉

朝の冷え風邪をひくなと子の手紙

加藤 政男

中秋になると昼の日は少し強くても、朝夕は寒ささえ覚えることがある。夏を過ごしてきたあとの一日の温度差は、体調に響いてく

選者=増田河郎子

る。風邪をひくなというのは、離れ住む親への心からの願いである。

〈佳作〉

虫の音や何も書かれてない手紙

橘 孝行

きくら這う手紙の束の赤き紐

山本のり子

横文字の手紙難解虫の夜

石原 新

●自由題

〈特選〉寝て覚めてこだわる一句虫の声

三ツ橋仁平

芭蕉は「舌頭に千転せよ」と言つて、推敲を重ねることを説いたが、これはそこに至るまでの道中のようだ。なかなかまとまらなくて、目が覚めるとまたそれが頭に浮かんでくる。「虫の声」もよい。

〈佳作〉

友らみな黙して行けりななかまど

結城 治作

今朝の海秋へ移ろう風の音

浜口 佳春

案山子にも朝の挨拶野良仕事

谷 しげ子

顔

秋深し無沙汰を詫びる顔はかり
眼も鼻もなき児の笑顔小鳥来る
朝しぐれ退院告げる医師笑顔
「いい顔」出来て一歳赤のまま
眉尻は父似の顔や指紙ぶる
亡き母の顔らしくなる秋日和
孫の顔女系多きや虫すだく
日焼顔みんな良い人夕蜻蛉
秋彼岸身内ばかりの顔そろつ
秋つら顔の表情かえて見る
手紙

秋彼岸文の書き癖父に似て
リハビリと思ひ逆手で書く手紙

周東澄江

河合富美枝

金谷友江

片桐てい女

佐藤雅子

中島富士子

石原 新

加藤政男

谷しげ子

山口信子

嶋田喜代子

中島一子

秋遍路ゆうべの内に置手紙

若き日の手紙の束す夜長かな

卒塔婆は死者への手紙濃電胆

秋草のひと筆美しき娘の手紙

秋彼岸母の手紙の懐かし

小鳥来て絵手紙講座賑はへり

百歳の翁の手紙墨枯れて

冬支度赴任の子へと添え手紙

さわやかや筆勢正しき師の手紙

絵手紙のはみ出す南瓜壁に貼り

自由題

咽佛金魚のフンと言われし子

糸切れてとびらる数珠や竹の春

あかあかと天守に登る盆の月

爪紅や幼き恋を想いけり

秋燕包丁凜と研ぎあがり

秋愁や濡れて芭蕉と曽良の句碑

冷えごろの西瓜で和む三世代

風強し墓参の人の手櫛かな

秋簾外して世事に近づけり

過疎村の野菊の路を通りけり

新涼や素足で渡る寺の廊

色褪せしボスターの顔夏終る

夕焼を池に落として暮れにけり

女郎花自由自在の風の揺れ

一条の風の美学と砂の秋

大場 清

周東澄江

鈴木順子

河合富美枝

金谷友江

片桐てい女

佐藤雅子

中島富士子

細田初枝

増田信子

山本美代子

嶋田喜代子

中島一子

鈴木順子

河合富美枝

片桐てい女

宮沢文子

山本のり子

佐藤雅子

中島富士子

細田初枝

島谷ときを

中村真一

増田信子

石原 新

浄土誌上句会の
お知らせ

題

ひとつは季語ではありません

日記

去年今年

自由題

締切・十一月二十日

発表・『浄土』二〇〇二年一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下

さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-1-7 14 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

漫画で楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

無頓着

「むとんちやく」とは、字のごとく、頓着しないこと。頓着とは仏教語の貪弱（とんじやく）からきた言葉で、深く気にかける、心配すること。もともとの仏教語の貪弱はむさぼり求めること、頓着すること、貪の字は三毒といわれる「貪（とん）瞋（じん）癡（ち）」のひとつ。これは煩惱の代表的な三つで、むさぼり、いかり、おろかさのこと。頓着と書かれるようになって少し意味が弱まったにしても、なかなか無頓着ではいられませんか、どんなことにも。



編集後記

満月をネオンとはかりにほぞをかむ 岱潤

今月号巻頭の平沢保治さんの講演は宗教者として聞くには、大変つらい講演だった。今月の七月我が宗でも「ハンセン病に関する謝罪」を発表した。その中で「国の隔離政策になんら批判することもなく、またあきらめをうながす慰め的な内容を説いてきたこと、それによって差別や偏見を温存助長してきた大きな誤りを自覚せざるを得ない」と述べ、「深く反省懺悔するとともに、心から謝罪するところであります」と表明している。平沢さんの話にもあるように、宗教者は、ハンセン病を「業病」「天刑病」として、過去の悪業の報い、前世のたたりとして、長い間説教で説き続けた。

「善因善果、悪因悪果」の教えも、偏った道徳律として語られ、そのことによつて傷つく人々のことは、何も考えてこなかった。

確かに道徳は時代を反映し、戦時下にあつては人を殺すことさえ英雄視し、殺される側のことは無視することが常だ。しかし宗教はそうであつてはならない。真理は絶対であり、国家が決める正義などに左右されないのが宗教者の使命のはずだ。だからこそ我が宗では謝罪文を発表したのである。ならば今回は、再びほぞをかむことがないよう、きっちりした態度が必要であらう。

(長)

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
村田洋一
佐山哲郎

編集顧問

大室了悟

浄土

六十七巻十一月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

発行

平成十三年十月二十日
平成十二年十一月一日

発行人

真野龍海

編集人

佐藤良純

印刷所

株式会社 シーアイイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明興会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三(二五七八)六九四七

FAX

〇三(二五七八)七〇三六

振替

〇〇一八〇八八二八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



夜間近し、静かに



足元注意



踏切あり



出入口



注意



安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



破れ物注意



安全第一



学童注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

法然上人の
“こころを味わう”
“3時間”。



○オープンセミナー

「そう、だから法然」

今、静かに、そして確実に広がりを見せている法然上人。
進むべき道を見失いかけている現代を照らす一筋の光。
法然上人の“こころ”を存分に御堪能ください。

Jodo Shu
Buddhist Communities
http://www.jodoshu.org

日時／平成13年11月21日(水) 午後5:30～午後8:30 (開場 午後4:30)

浄土宗本願法然上人800年大遠忌記念

場 所 よみうりホール(JR有楽町駅前) 東京都千代田区有楽町1-11-1

入場料 1000円

お問合せ 「法然セミナー事務局」 ☎03-3436-3356(9:00～17:00)

主 賓 浄土宗 協 力 桜木山知慈院 大本山増上寺

チケットお申込み先 (10月1日より発売)

出 演 法華 鎌倉善徳院 住持
日本宗匠 平山順夫



法華-11の法華のついでに、新書
カトリックの法華 井上洋治



法華の法華 鎌倉
明治学院大学名誉 岡田利雄



法然上人の法華 鎌倉
明治学院大学名誉 岡田利雄



法然上人の法華 鎌倉
明治学院大学名誉 岡田利雄



法然上人の法華 鎌倉
明治学院大学名誉 岡田利雄



「法然セミナー実行委員会」

☎03-3436-3356(9:00～17:00)

On-line Service
チケット
ぴあ
03-5237-9999

ローソンチケット

☎03-3569-9900

講演・朗読
増上寺式部会
増上寺講演会

